

## 特別優秀賞

親切を描こう

熊本県 熊本大学教育学部附属中学校 一年  
今村 奏翔

「さあ、今日も頑張るぞ。」

この四月に憧れの中学校へ入学し、新しい生活が始まった私。新しい制服に新しいカバン、そして新しい友人たち。通学の電車には、私と同じようにやる気に満ちたクラスメートがたくさんいる。おはよう、暑いねえ、お先にどうぞなどと言葉をかわす朝、マスク越しだけれど、笑顔なのがわかってとても清々<sup>すがすが</sup>しい気分になる。こういう登下校中のなにげないやりとりが、私はとても気に入っている。

私は、部活動も始めた。入部してすぐの私に、先輩方はみんな優しく、そしてかっこいい。今思い返せば、初心者ならではの的外れな質問も、たくさんしたかもしれない。けれど先輩たちは、どんなときも親切に教えてくれる。私も来年には、後輩に親切な二年生になろうと心に決めている。お手本にした人が同級生にも、先輩にもたくさんいるこの学校が大好きだ。

ある日の帰り道のできごとである。エアコンの効いた駅の待合室が満員で、入ることをあきらめた私と友人の二人にとって、この夏の日<sup>の日</sup>の暑さはかなりの強敵となった。次の列車が来るまであと数十分、持っていた水筒一本で暑さと戦いながら、階段の裏の小さな日かげに座り込み、二人で問題集を開いたときだった。

「あのう、勉強中にすみません。君たち、いつもこの駅使っているのかな。熊本駅まで行きたいんだけど、どう行けばいいかわかるかな。」と、声をかけられた。右手にスケッチブック、左手にオレンジジュースを持ち、重そうなリュックを背負ったその男性に、すぐに友人と二人で立ち上がり、ホームの場所と行き方と次発の列車の時刻を伝えた。

すると、その男性は私たちの隣に座り、ポケットからサインペンを取り出し、持っていたスケッチブックを開くと、何かを描き始めた。紙の上をシャツシャツと音を立てながら滑<sup>すべ</sup>るサインペン。あっという間に二枚目。描き終わると、べりっとはがして、私と友人にそれを、

「ありがとう。これ、お礼にあげるよ。」

と言って渡してくれた。紙には、かわいらしいが、ちょっと不思議な世界観のラクダのような動物が描かれていた。目の部分がとても優しそうに見えた。黒いサインペンだけで描かれているのに、なぜかカラフルに見えるような気がした。

男性はプロの絵描きで、秋に開催する個展の準備の合間に、いろんな場所を旅して絵を描いているのだと教えてくれた。男性が旅先で見た風景や色が、そのまま個展に並ぶのだそうだ。

その後も、列車が来るまでいろんな話をした。「いい気分だといい絵が描けるんだよね」と言いながら、また次のページにもペンがシュルシュルと走っていた。私たちの小さな小さな親切が、男性の個展に並ぶ絵の中に優しい色を添えるかもしれないと想像すると、夏の暑さでいっぱいだった私の胸に、涼しい風が吹き抜けていくような気がしてうれしくなった。